

なす（ナス科）

【特徴】

ナスはインド原産の作物で、栽培の歴史が長いだけに地方独特の品種が豊富で、各地域に適したそれぞれの品種が栽培されている。夏野菜の代表で料理の範囲も広くて便利。長期収穫できる作物である。

生育適温は昼間22～30℃、17℃以下では生育が鈍る。15℃以下および30℃以上では不稔花粉が発生するようになる。

乾燥に弱く多肥を好むので、土壌は排水よく土壌水分が多く、有機質にとみ耕土が深いこと。最適pHは6.5前後である。

【作型と品種】

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	主な品種
露地		○	△	△	◎	□							千両、黒陽、千両2号、黒つばめ

【栽培技術】

1. 育苗

苗床準備

床土は前年から堆肥と土を堆積した慣土床土、または完熟堆肥と土を半々に混合した速成床土を使用する。又は市販の野菜専用床土を使用する。

は種床の地温は30～31℃とし、床土に水をやっておく。

・速成床土の配合割合

例1 土：完熟堆肥 = 5 : 5

例2 土：完熟堆肥：モミガラ = 6 : 3 : 1

・肥料（配合床土1㎡あたり）

チッソ 100g、リンサン 400g、カリ 100g

種まき

ナスは大苗を定植する人が多い。大苗定植の場合は2回鉢上げをするので、定植の80日前に種まきする。中苗定植の場合は種まき後30日ですぐ鉢上げをするので定植の65～70日前に播種する。発芽後から本葉2.5枚までは昼間25～28℃、昼夜温度差を7℃で温度管理をする。

鉢上げ

は種床から鉢上げをする場合は、種まき後30日で行う。大苗にする場合は鉢上げの30日後に15cmのポリポットに植える。

2. 定植

ほ場の準備

定植の20日前には基肥を施用し、幅180cm～200cmのうねを立てる。高さ15～30cmの高うねにする。定植の4日前には十分に水をやりポリマルチをして地温を高めておく。

施肥

基肥は一般の配合肥料と有機質肥料を組み合わせせて施肥する。追肥は第1果着果から本格的に施用する。

定植

ナスの花蕾の着色始めが定植の適期である。晴天無風の暖かい日が2～3日続く日を選んで株間60～70cmに定植する。浅植えにし暖かい水を少量灌水して地温を下げないようにする。定植の1～2時間前にポットに十分水をやり鉢土が壊れないようにしておく。定植後仮支柱を立てる。

ホルモン処理

ホルモン処理は、1番花開花後から梅雨明け、そして9月の秋雨期に行う。

・処理法

5月中旬～6月下旬 トマトトーン 50倍

9月上旬～9月中旬 トマトトーン 70倍

開花当日～1日後の午前中、温度の低い時間に霧吹きで花にかける。

3. 整枝・誘引

主枝の仕立ては、3本仕立てとする。

1番花がついたら、その下のわき芽を2つ残し、ほかのわき芽は取り除く。主枝とこの2本を合わせて3本になるので3本仕立てという。

整枝は7月中旬までは、あまり強い側枝の整理は行わず、摘葉も病葉、古葉、果実の邪魔になる葉の摘葉にとどめる。

7月下旬～9月上旬の期間は、徐々に側枝の更新を行う。主枝の各節から出る側枝は、第1花の先に1～2枚の葉を残して摘心する。側枝のわき芽は、主枝に近い外向きのわき芽を1つ残して他はつみ取る。

側枝の果実を収穫するときに、側枝を残したわき芽の上で切る（切り戻しせん定）。側枝はどのように1果収穫ごとに切りもどしていく。

9月中旬～収穫終了までは、あまり強い整枝は行わず、込み合った側枝の整理にとどめる。病葉、古葉、果実の邪魔になる葉の摘葉は早めに行う。